

# 学園ニュース

富山大学

No.32

編集 学園ニュース編集委員会 発行 富山大学

昭和 55 年 3 月 15 日

## 卒業生諸君を送る

学 長 柳 田 友 道

本年3月25日をもって、わが富山大学から多くの卒業生を世に送り出すに当たり、私は諸君に対し心から御祝い申し上げ、また諸君の前途に大いなる期待を寄せたいと思う。

諸君がこれから巣立ってゆく現在の社会情勢は、御存知の通り世界的に危機的様相を呈している。このような情勢のもとに社会への第一歩を踏み出す諸君は、考えようによっては、自分自身を試すまたとない機会を与えられたものと言えないであらうか。人は誰でも一生を坦々と平穩無事に過ごせるものではない。必ずや苦難の道を歩まねばならないことがある。諸君は偶偶卒業後いきなり峻しい山道に差し加かることになるかも知れないが、それにくじけないだけの下地はできているものと信じたい。

諸君を待受けている社会の一つ一つの職場では、残念ながら諸君が大学で学んできた知識や経験にはそれ程期待を寄せていないというのが現実である。それは何故か。この点現在の大学教育そのものにも責任の一端があるかも知れないが、近頃のように多様化した社会においては、個々の職場にはそれぞれが持つ独自の運営形態なり方針なりがあって、各職場では毎年職員を受け入れるに当たって、はじめからそれに沿った人材を養成しようと臨んでいるからである。このような現実に対して諸君がそれに答える道は、諸君の持てる力量の基盤の上に立って、初心に帰って与えられた職務に対する誠意を示し、努力を傾けるしかないと思う。

諸君はこれからいかなる職業に就くとしても、それを生活の基盤とする以上、職業人、すなわちプロとして

の自覚——プロ意識——を持つよう努めねばなるまい。プロ意識とは何か。過日私はラジオで偶々将棋の升田名人の話を聞いた。彼はプロについてこう説明していた。プロとしての第1の条件は自分の師を超越するという不断の追求を行うこと、第2は瞬間的に適確な判断が下せるように集中力をそなえ持っていること、第3は一つ一つの仕事を終えるとき、いちいち仕事の確認をすること、そして最後に精神は常に若々しく、夢を持ち続けることと結んでいた。私自身もプロとしてこれまで学問の道を歩んできて、自分の一生を顧みるとき忸怩（じくじ）たるものがあるが、この話を聞いて将棋も学問も進むべき道は一つだと痛感した。私は以前に娘の音楽の教育のことで、バイオリンの先生と長くお附合いしたことがあるが、話をすればする程、音楽の道も学問の道も同じであることを知って、本当に興味深かった。その先生が常に強調されていたのは、徹底的に基礎を固めること、自分で考えて工夫すること、そして他人が遊んでいる時でも、一年中練習を欠かさないことであつた。このように考えてみると、プロが大きく育つためには、仕事の内容のいかにかわらず、何か共通的に身につけねばならないことがあるように思えてならない。

これら共通項の中でも不断の追求とか休みなき努力ということは、たとえプロとしての素質に欠ける者にとっても、やる気さえあれば実践できるはずのものであり、現にこれだけでプロの道を立派に歩んでいる者もいる。わが国は資源の欠乏にもかかわらず、国民の働く意慾に支えられて経済的に何とか自立できている。

私自身も不断の追求努力だけを頼りにしてこれまで過ぎてきたし、これからも続けたいと思う。卒業生諸

君も実社会へ出てから、この点の大いなる実践に努めてほしい。

## 知 識 と 経 験

人文学部長 本 田 弘

大学4年間の課程を無事に終えて、卒業の日を迎えた諸君に、心から「おめでとう」と申し上げたい。

卒業証書を手にし、長く親しんできた学友や教師と別れて校門を去る卒業生諸君の胸中に何が去来しているのか、私の卒業時、昭和28年当時のことから推測しようとしても、そこには長い年月の隔たり、時代の相違等があり、諸君の胸中を推測することはやや無理であるように思われる。

しかし、親や様様の人人の庇護から離れて、諸君自身の良識と判断とに基づいて、これからの人生を生きていかなければならないということだけは、相共通しているであろう。また、多くの諸君は、大学において修めた学問とは直接的にはあまり関係のない職業に従事するというのも、当時とは、それ程変わっていないように見られるのである。

ところで、大学で学ぶ知識は、社会においては役立たないということが、普通しばしば言われている。そしてかような言い方の中には、大学教育に対する批判の意味もこめられているであろう。そしてまた、私が触れようとするのも、かような指摘が全く誤りであるということをおもうとするものでもない。むしろこの指摘は、一面においては正しいことをまずは認めてかからなければならないだろう。もともと学問・知識というものは、そのままのかたちでは、社会生活や職業に結びつきえないものだからである。

たしかに知識は、経験に由来する。しかし経験そのものではない。知識は経験から得られたもの、経験の中に含まれている様々な要素を抽象し、捨象することによって成立つという事情が、知識に付随しているわけである。それだけに、知識と経験（現実）との間にはつねに一定の距離・隔たりがあり、知識は現実と直接には結びつきえないことを本質としている。そしてその隔たりは、学問の種類によって異なるとしても、一定の隔たりや距離が両者の間に存するという事態は、どの学問にも妥当する普遍的な事からである。

しかし、もしかような事態が不動であり、距離は埋められえないものとしたら、どうであろうか。大学で学ぶ知識は社会において通用しないという指摘は、全く正しいということになるだろうし、諸君が大学において勉学を重ねたこと自体が徒労であったということになるはずである。

ところが、同時にまた両者の間に介在する距離は埋められることをも本質としている。すなわち両者の間に介在する距離は埋められてゆくことによって始めて、知識は知識として生きたものになりうるのである。しかもその距離を埋める役割を担っているものが、諸君のこれからの社会における経験にほかならないわけである。それというのも、知識の形成において捨象された経験の様々な要素が、諸君の経験をとおして再び取りもどされ、知識の肉付が行われることになるからである。そしてそのかぎりにおいてのみ、知識本来の意味が理解され、知識は生きた知識として、諸君の生活の指針となりうるのである。

しかしながら、知識が十分に理解されるには、20年、30年という長い年月を必要とすることであろう。あるいは、生涯をとおしての経験をもってしてもなお及ばないものもあるかもしれない。

以上のことから、知識のもつ一面の事実だけにとらわれて、知識と経験（現実）との間に介在する隔たりを埋める努力が放棄されることのないことを、私は願っている。更に言えば、大学4年間、あるいは学校生活16年間に学んだ知識は、知識全体から見れば、きわめて僅かなものでしかないかもしれない。しかし諸君は、自己の経験を豊かにし、その豊かな経験によって知識の抽象性を具象化し、更にその上に新しい知識を重ねるという努力を生涯つづけてゆくことを、私はなによりも願っている。なぜなら、かような生き方においてのみ、生きることの真の意味が理解され、そこに人生の充実を求めることができるはずだからである。

## 卒業生に贈る

教育学部長 大澤 欽 治

卒業生のみなさん、御卒業お目度うございます。みなさんが、新しい教育学士として、若々しい教育的センスをもって活躍する日の近いことを私はこの上なく大きなよろこびとしています。

この栄ある門出の日を迎えることができたのは、勿論みなさんそれぞれの研究の賜物であることは言うまでもありませんが、やはり何と言っても、みなさんがこの世に生を受けてから今日まで、深い慈愛をもってはぐくんでくださった御両親をはじめ、小学校の門をくぐって以来10数年の長い勉学修業の間に受けた諸先生方の教え、あるいは朋友との切磋琢磨を改めて噛みしめ、それらに対して感謝の念を捧げなくてはならないと思います。

みなさんは、もともと教師になることを志望して本学部に入學したのでありますが、その当初に抱いた将来への夢や抱負は、おそらく漠然としたものであったと思います。それでよかったわけですが、しかし今はきっと違うと思います。それが当然です。今のみなさんには、それなりに教師としての心構えが芽生えており、教育者としての自覚が形成されていると思います。みなさんは、心の奥底で＜子供達にとって、より好ましい先生になろう＞とか＜ペスタロッチの人間愛の精神を少しでも具現して……＞などと念じているのでしょうか。つまり4年前に抱いた漠とした中の小さな一点が、今やふくらみ、充実して、具体的な教師という姿にまとまって眼前に現出してきているのです。

今から丁度40年前に遡ることになりますが、教育学部の前身である富山県師範学校を卒業した私は、その点では一応みなさんの先輩にあたることになります。弱齡19才、丸刈頭、学生服で教壇に立っていた往時が懐かしく思い浮んできます。顧みると、私が教師になることの「おそろしさ」と「よろこび」を初めて感じたのは、附属校での教育実習の時、つまり教生時代のことでした。もっとも私の時代には、教生は1学級に1人か2人配当され、3ヵ月間も鍛える方式でしたから、それなりに中味の濃いものだったと思います。私の教師としての初心は、この実習期間中に附属校の諸先生方によって植えつけられたものと思います。

さて私が母校に奉職して30年余りになりますから、すでに20数回卒業生を送り出してきた計算になります。その間、私は音楽教育の研究や実践活動が続けてきたのですが、音楽の指導に当たっては、知識や理論や技術を支える「音楽的センス」を育てなくてはならないと考えています。それでは、このような「音楽的センス」とはどのようなものなのか、また、それをいかに育てるかということになりますと、その探究の道は果てしなく遠いものと言わなくてはなりません。しかし私は、さらに「教育的センス」がそれと同時に重要であること、そして「音楽的センス」と密接に関連し合うことに気がついてきました。こうして、私なりの探究の道は、はるかに難しく、広範囲にわたってきたと言えます。＜楽は人なり、音は心なり＞という、まるで禅問答のような境地に踏み込むこともありました。このようにして、「教育センス」とは何か、と長い間探し求めて、私なりに漠然とこんなことではないかと思うことをつかんでも、それを学生諸君に示すことはできませんでした。そういう経緯の中で、このようなことはあまり意識して示す必要はないのであって、実践によって、無言の中に、各人各様につかんでいくものでないだろうか、などと悩むようにもなりました。私は、かねがねどんなことでも稽古することによって身につく、それは技術や知識だけではなく、自分の心の持ち方も稽古によって洗練され则认为、それをいくらか実行してもみました。およそ人間は、自分自身の姿や心があまりにもよく見えないようにつくられているらしく、他人のことならよく見えるものです。そこで自分の姿を見る方法がないものかと、これもまた悩まされた問題でした。

結局「教育的センス」とは、「相手（子供）の側に立って」とか、「相手の心になれるように」と、こんなありきたりの言葉でしか表現できないように思います。＜子は親の鏡＞と言いますが、全くよく言ったものだと思います。これを今の場合＜生徒は教師の鏡＞と言い換えることができます。自分の姿を自分自身で冷静に客観視できたら、これに過ぐることはありません。しかし今となっては、私は、私の周囲の学生を

鏡として、自分をうつして見る訓練に切りかえたのが得策だったように思っています。

みなさんに、私の独り言をこぼしてしまいました。洋々とした人生がひろがってくる若いみなさんには、たとえどんなことがあっても、これはすべて自分の心

の成長の糧として、つとめていかれんことをお願いいたします。みなさんの御健闘と、その人生に幸いの多いことを祈念してやみません。

## 片すみの職場にも、大いなる野心を

経済学部長 植村元覚

卒業生の多くは、それぞれの職場で今後の長い人生を生きぬき、新たな社会での生命の「保育」に努められる。その就職先は、必ずしも華やかな大企業あるいは国際的な脚光を浴びる所ではない。それどころか職場の実情は、学生時代に考えていたものには、ほど遠いかもしれない。それはいわば日本経済の片すみの職場といってもいい。

しかしそこで、これまで学んだ知識も、活動意欲も、固定化し、わい小化して、平穩裡に生命を「温存」するにとどまらないように心がけ、そして進歩的に広い視野をもって、激動する世界の経済に対応するために大いなる野心をもって、着実に努力してほしい。

私はこのことを述べるに当たって突然かもしれないが、大学生活を暮らした富山のもつ環境あるいは富山の風土を認識してほしいのである。風土は、ヘルデルや和辻哲郎によるまでもなく、根源的には、自然の影響をうけながらも、その自然に対する人間の主体的形成のありかたを示し、ここに生活する人びとの人間形成の場として関係づけられる。

この立場から富山をみると、富山は北陸に位置しながら、極めて活動的な歴史形成の場であった。その主なものを求めると2つがえられる。1つは零細経営ながら全日本的範囲の活動であり、他ははるか北方への活動である。前者は幕藩体制のきびしい枠の中の藩際経済における富山の売薬商人の全国的活動、そして後者は明治以後の北海道からさらにサハリン、千島、オホーツク海、カムチャッカ沿岸における活動である。

前者は、現代風に直していえば、全世界への活躍であり、自動車やカメラのように世界市場への進出に当たる。医療技術が幼稚な伝説的、宗教的な薬草を主とする地方的時代に、超地方的な普遍的な全日本の商品に

脱皮しようとして、それは中国からの優れた漢方薬を主原料にして成就した。またその経営は、信用を基に巧みな財務管理やサービスを加えて完成した。

私は、これは「完全な商人」といえるほどに完璧な経営であったと評価したい。完全な商人とは、17世紀のフランスのジャック・サバリー著の「Le Parfait Negociant」に由来する。これと富山のが規を一にするのである。この古い文献は入手が困難である。幸い図書館長をさせていただいたとき、(恰も東大、阪大、名大の館長が旧知の親しい間柄であったので、国立大学図書館協議会の役員にさせられ、忙しかった。これは学部長の職以上に多忙であり、勉強もせねばならなかった)その分科会が東北大、東大、京大、阪大で開かれたが、その際に余った時間があると、これらの図書館で、これについて文献を調べるのが、別の興味あることであった。その結果、富山売薬業経営の素晴らしさが判明した。(そのうえに任期がきて辞めたら同協議会長から感謝状も受けた)。

とにかく世界的にも素晴らしい経営が富山に成立した。また北方での開拓者の活躍や北洋漁業も、たくましい野心的な伝統であり、共に今も残っている。

富山は、これだけの経済的優秀性、たくましさ、その人間の歴史的・風土的形成の中に類型づけられると考えられる。短期間であっても富山に住みついた諸君は、生活体験の中からこの精神的風土を認識されて、今後であっても、野心的に大きく伸びるように活躍されることを望むのである。これは近代経済学者のシュンペーターのいうように、「豊かさのこの神聖な10年」を、1980年代のはじめにおいて、構築していくべきフレッシュな青年の課題であるともいえる。

## ImitationとCreation

理学部長 竹 内 豊三郎

ロートレックは歌麿を、ドガは北斎を、ゴッホは広重の版画のモチーフと構図を媒体にして光と影の新しい手法を create した。ヨーロッパの長い絵画の伝統から脱出する動機は日本の版画を知ったことによる。彼等の作品は後期印象派の巨匠としてパリの近代美術館の壁を飾っている。

ドイツの医師ロベルトマイヤーは熱帯地方への船医をしていたとき、船内の患者の血液がヨーロッパを出発したときにくらべて濃い色をしていることをみつけて、熱力学の第1法則（エネルギー保存の定理）を導き出した。血の色の変化は熱力学の法則とは直接の関係はないはずである。どうして、このような法則の発見になったか大変不思議なことである。多分、日頃か

ら彼はエネルギーの本質や不可逆性に強い関心を持っていたからであろう。血液の色の変化がその酸化反応に結びつき、さらに第1法則にまで飛躍し、教科書にも残ることになった。

新しい発見には必ず種があるようだが、種から吹き出した芽や花は種とはまるっきり違った形態になる。

もし種と同じ形で拡大されたり、単に色あいを変えただけでは imitation にすぎない。imitation は誰にでも出来るが creation はそう簡単ではない。それは原形に満足して服従するか、または対抗するかの違いがあるからである。creation は若い時にしか出来ない。それはその途上に失敗があっても快復もまた速いからである。

## 80年代の課題 — 卒業生に期待する —

工学部長 大 井 信 一

今年もまた卒業期を迎えて、学窓を去る諸君の胸中には、希望と不安の交錯する複雑なものがあることとします。4年間の勉学に培われ、いささか自信はあるにしても何分にも未知の社会への出発であり、そのうえ諸君を迎える社会環境がこのところ一段と厳しさを増している事を考えると、送り出す者としては手放しで樂觀もしておれないのが正直なところです。

イランに明け、イランに暮れた79年が終わり世界は80年代に入った。第一次石油ショック以来、省資源、消エネルギーをうたい文句に経済の低成長政策に対応する企業努力によって、どうやら前途に曙光を見出し景気も回復のきざしをみせ、80年代に希望をつなぐかに見えたが、石油供給のカギを握る石油輸出国機構(OPEC)がサウジアラビアの影響力低下で分裂状態になり、石油価格がのぼりになったことは石油情勢の前途を混迷におとし入れ、我国の経済を痛撃する結果になった。総エネルギー量のうち75%を輸入石油に頼っている我国の現状が続くかぎり先の見通しは暗い。70年代の十年間に原油価格は、十数倍に高騰しとどまる所を知らぬ有様である。石油価格に連動する電気、ガスなどのエネルギーおよび原材料の値上げが80年に入って目じろ押しにならんでいる。並大抵の経営合理化、企業努力では吸収できないから製品価格へ転化される。当然国民生活を圧迫し購買力を低下させ景気の後退に

つながる。80年代の課題は何と云っても脱石油であろう。省資源、消エネルギーのさいたるものは石油からの脱却である。政府も「サンシャイン計画」や「ムーンライト計画」で脱石油を目指す技術開発を進めている。官民総力をあげて取組まねばならぬ問題であり、新時代の要求に対応する知識と視野をもった創造性の豊かな工業技術者が求められている。これからの工学部卒業生はこれらのニーズにこたえていかねばならない。それぞれの職場において、たゆまぬ進歩を目指す企業姿勢について行くため最大の努力をはらわねばならないだろう。80年代はより厳しく個々の技術者の能力、真価を問われるだろう。そして個々の能力を広く結集した総合力を発揮せねばならないだろう。常に追求心、探求心を失わず、物事を分析し、総合する能力を養い、充分把握している基礎理論を問題の処理に当たって応用する努力を積重ねて行く。そして次第に豊富な経験に裏打された自己の能力を如何なる環境においてもいかに発揮できる自信を持った技術者になって欲しいと思います。しかしながら、個人の能力には限界がある。とくに今日のような学際的問題の解決には、多くの分野の多彩な能力の相乗効果、総合力の発揮が絶対に必要であろう。80年代の幕明けにあたり、若い頭脳に期待するところ大である。諸君の健闘を切に祈ります。

## ◀◀◀ 昭和55年 4 月 1 日付退職者 ▶▶▶

人文学部 教授 手崎政男  
教育学部 教授 頭川徹治  
教養部 教授 小森 典  
経理部 文部事務官 経理部長 荒井甚雄  
教育学部 文部事務官 事務長 酒井 弘

教育学部 文部技官 山本秀正  
" 附属学校 文部技官 神戸寿々代  
工学部 文部事務官 中村理正  
経営短期大学部 用務員 藤野良雄

### 見るべき程の事をば見つ

人文学部教授 手 崎 政 男

古典を読んでいきますと、強く心をとらえることばに遭遇することが多いのですが、知盛最期のことばとして平家物語に伝える「見るべき程の事をば見つ」もその一つです。知盛とはもちろん状況を異にし、したがってその含意も同じであるわけがありませんが、なぜか今このことばが私の心に去来します。

本学に23年間勤務したと言いましても、私よりもずっと以前に着任された方々がなお多数本学に御在任でいらっしゃいますし、私の在学した大学を含めても、経験した大学は二つしかありませんから、私に特別に何があるというわけでもありません。しかも、自身に納得できないことはどうにも我慢がならぬという狷介な性格のために、多くの方々にどんなにか御迷惑をお

かけしたことであらうと思ひ、ここに謝意を表するほかはありません。思いがけず本学に着任が許されましたが、私の研究上の蓄えなど、恥ずかしいほどに貧弱なものでありましたから、その意味でもひたすら微力の限りを尽くしてきたつもりであります。至らぬ私をよくここまでと、すでに本学を去られた恩師・先輩の方々や同僚の諸先生方からはもちろん、学生諸君からも実に多くの恩恵を受けましたことを痛感し、かつ、申訳なくも存じます。日暮れて道遠しの感はいなめませんが、なお将来を期して、何らかの形でお報いしたいと願ひいたします。

皆さま、長い間どうもありがとうございました。

### 人生登山 8 合目あたりに辿りついて

教育学部教授 頭 川 徹 治

人生とは何をなしたかと云うことより、どう生きて来たかが重要であると謂われる。残念ながら今私は何をなしたかを記すことによって生き続けて来た証明をするしかない。昨年から大正生れの教授の方々の停年退官が始まり、私も続いて愈々退官を迎えることになった。よくも永らく生き続けてこられたと云う実感の方が強い。大正末生れの人々は明治と昭和には生まれ、殆んどの人々が戦争体験者であるという特徴をもち、しかも軍国時代と民主国家としての平和の時代に生き続け、誠に順応性の強い人々の集団だと云われている。私もその集団内の一人であるが、標題に掲げた8合目あたりに辿りついた感じを強く抱いている。長寿社会の入口に立った今、健康第一がモットーとなり、家族に迷惑をかけないよう健康を維持し、社会のためのボランティア活動と、自己に適した仕事をもち、楽しみや趣味を生かし、視野を広く暮していきたいと思います。

いる。さて歴史の流れを10年毎に区切ってその時代にふさわしい名をつけて呼ぶことは誠に好都合であるが、実際には仲々むずかしい。それは社会変化の中にずれがあり適合させることが至難な点があるからである。私は約40年間（実際には39年8ヶ月）近く富山大学に籍を置き現在ふり返ってみると大学も私個人も決して平穩無事な経過をたどったとは思えない。私が富山大学に抱括された前身校の高岡商に勤務したのが昭和17年であり、ここを出発点として専門学校から新制富山大学につながる教育・研究の第一歩を印したわけであるが、あれから約40年近く実に月日の経過の早いのに驚く。青年期から現在の老年期に至り精神的にも肉体的にも大きな変化をして来ている。先ず永らく種々な面で公私にわたりお世話になった先輩、現在の大学各部局の方々の御交誼に対し心から厚くお礼申し上げたい。

少年時代からわんぱくで、好きなスポーツの道にとりくみ、青年期以後体育の道一すじに微力ながら盡して来て、今尚壮年期の体力と気力を維持していると自負し維持しつづけていることに感謝したい。ほんとに永い道程であり数々の思い出が走馬燈の如く去来するが、そのうち最も鮮明なものについて記させて戴くことにする。

## I. 高岡高商時代

社会状況の変化、国の施策により高商→経専→工専となる。戦時下、食糧難時代を経て終戦を迎える。一億総生産時代であり、食糧難は人間の死活に直結する。食糧増産のため、開墾作業が旺んであり、学徒勤労員による師弟共働の開墾作業、荷役、飛行場整備、軍需工場への出動、旧8号線の補装作業など盛り沢山の行事万能時代だったと云える。また現在の体育は体操→体錬科→体育と移り変わり、特に国防力の増強のため軍事教練が強化され体操も軍色が濃くなった。

師弟共働の中で体力づくりに専念する

◎応召 学徒出陣の学生と共に再度の応召。初年兵、補充兵教育にここ旧富山第35連隊（現富大）での軍事教練は本土決戦と云うなげかわしい事態が到来し、その決戦部隊の一員として、富士山ろく、横浜の山中、千葉にて終戦まで軍務に服した。20年からの戦後新制大学として発足の富大に所属するまでの6年間程は相変わらず食糧難時代、配給時代であり、その中でスポーツ活動が旺んに行われ、高専大会に学生を引卒、特にスキースキの神鍋山での大会でスキー部の優秀な成績をあげたことが印象に残っている。バレーボールも仲々強かった。

## II. 教育学部体育科教官として着任して

軍事教練で鍛えられた想いで旧歩兵第35連隊焼け跡が教育学部となり、ここに前身校体育教官全員集結、一般教育、体育実技と専門体育とを兼ねて受

けもつことになる。教育学部に所属しての初の教官会議は元将校集会所であり、誠に殺風景だったと記憶している。創設期の無からの出発はさまざまな逆境における体験を教官も、学生も共に味わった。物資不足で、配給品の豚皮のスキー靴や登山靴、運動靴もすぐ破れるなど、又ヤッケも少なく、カーキ色の軍隊の残品の被服や、米軍から流れて来た、シラフ、ヤッケなどはらんし、現代とは隔世の感が深い。グラウンドやコートはその後五福集中の各学部が来る毎に変更が余儀なくされ、体育館も雪中演習場が与えられるなど体育逆境時代だった。約40年間の変化には見るべきものがあり、第1、第2グラウンドの創設、第1、第2体育館の設置、体育棟の建設などその後着々と充実して行ったことは時代の流れとは云え誠に目を見はるものがある。定員の少ない体育科の同窓会のメンバーも約250名を越えそれぞれ富山、石川両県で体育指導者として大活躍していることは嬉しいことである。保健体育科は身体活動により健康なからだを維持し発展させる人間形成の唯一の教科である。日本の教育には、ゆとり（自由）と健康な遊び（スポーツ）が乏しいと云われる。宿題に追いかけている。この窮状打開は保健体育の教師に期待がかけられている。そのためには大きくのびて貰いたく思う。更に克服スポーツの重視は、勇気ある教師養成の必須課目であると同時に、これに処しては安全を第一に人命の尊重を考えねばならないとの実感を強く抱いている。

私がかねがね座右の銘として徳川家康の「己を責めて人を責むるな」を教訓としてもっているが今後とも末永く心に銘じていきたいと思っている。最後に私が併任校長として二期努めた附属養護学校の内容充実強化が逸早く達成されると共に富山大学自体の今後のよりよき発展のため構成員の皆様の御盡力を期待してやみません。

## 退官に際して—よりよき大学への発展を祈りつつ—

教養部教授 小 森 典

富山大学創学以来30年あまりもお世話になり、いよいよ退官となると、やはり感慨深いものがある。特にこの様な駄文を書かなければならない破目に立ち到ると、あれこれと想起することもあるが、苦しかったことさえ今は懐しくなってしまう。これはいい

ことの方は忘れないでいるという私の得な性分によるものかも知れないが、やはり時間の浄化作用と言うべきであろう。

だが、今後数年は教師として過ごすであろうことが予測される身として、忘れることもないであろうし、



また忘れずに参考としなければならない。辛かったことは、時により授業のやり方・重点の置き方を変えてみるなど、苦心をしてみたのにその成果があがらなかった、という場合のことである。この様な努力の結果の空しさを味わう辛さは、長年教壇に立つ先生方は恐らく皆味わっておられることであろう。学生諸君の方も努力し勉学に励んで頂きたい、と申し残して去っていききたい。

けれども、私はよき学生に恵まれていたと思う。殺風景な研究室に自分で画いた絵を飾ってくれた学生も数人いたし、退官記念品を持って来てくれたクラスも

あるし、卒業後も研究室に立寄ってくれる学生も全学部にわたるし、先生の授業で英語が好きになったと、こちらを驚嬉させるようなことを言ってくれた学生もいる。顧問をしていた運動部からはトロフィーを貰い、私自身は一度も経験しなかった優勝の感激みたいなものを味わせてもらったりした。本当に恵まれて過ごせた歳月であった。

その上、よき教官、よき職員の方々に囲まれて過ごして来たのであるから、今更、肩を張って語る必要はない。ただ感謝しているばかりである。

ありがとう      ありがとう      ありがとう

## 第三の人生へ

教育学部事務長      酒   井      弘

退職に当たり、学園ニュース編集委員より何か書くようにと言われ、いささか戸惑い、またいよいよその期の来た事を改めて痛感した次第です。

私にとってこの退職は第三の人生に踏み出すことになろうかと思えます。第一の人生は終戦による日本への引揚げまでであります。私はもともと満州（現中国東北区）の奉天（現瀋陽）生まれで生粋の大陸育ち、30才までは主として戦中戦後の混乱期を彼の地で過ごしました。前半の就学期は至ってノンビリムードでしたが、戦争もいよいよたけなわになる頃の後半には満鉄に入社し、後は軍隊生活で大半を過ごしました。初年兵時代は、今にして思えばくしき縁である現富山大学キャンパスの旧富山35連隊に入営、重機関銃中隊に配属されました。兵舎は今の人文学部長室の辺りになりましたでしょうか……初めて正門（形は違うが現在地）をくぐったのが今から41年前の1月10日のことです。入営当時外地から当時の内地としては異様な恰好（背広と短靴で来た者として異端者？扱いされ、古兵の早口の富山弁にはいささか閉口、ついて行けず情ない思いをしました。約4ヵ月後、北支（現中国山西省）に派遣されました。ここでは少しばかり話せる中国語で重宝がられ、作戦行動では度々危険を味わされたが、また反面、専ら中国青年の教育に起用され、彼らと起居を共にしたのが今懐しく思い出されます。除隊後は満鉄の職場に復帰し、間もなく終戦。余儀なく接收された中国長春鉄路公司に残留、然し治安悪化により妻子を先に引揚げさせ、いつの日か日中国交回復を願ったが、当時としては到底望み薄く、意を決して日本

（親爺の故郷富山）に引揚げ、そこを第二の人生として踏み出し、そして縁あって富山薬学専門学校（現富山医科薬科大学薬学部）に就職したのが昭和23年9月11日のことでした。当時としては、今日まで勤め得るとは予想だにしなかったのですが、今、31年6ヵ月余りも勤めさせていただき、ここに無事退職することになり感無量なるものがあります。

富山大学での略歴は、昭和24年5月新制大学発足と同時に本部会計課司計係の仕事を振出しに、昭和30年薬学部会計係、35年教育学部会計係、38年文理学部会計係、41年本部会計課、続いて事務長として併設経営短大、経済学部、薬学部、教養部、そして最後に教育学部と、この五福キャンパスでは図書館と学生部を除き殆んど全部局を一巡したことになります。その間、各部局では理解ある上司に恵まれ、また協力を惜しまぬ同僚の援助に支えられて、どうにか無難に富山大学を去る事は、その間いろいろと困難な事態はあったにせよ、私にとって誠に恵まれた第二の人生であったと思います。

退職後の第三の人生は、過去の経緯から推定すればあと約30年の余生となることになりますが、老夫婦食べるに事欠かなければ、我々の生まれ故郷中国への墓参り、また次男のいるブラジルへ、そして、その他海外に目を向け希望を大きく余生を有意義に過ごしたいと思っています。

今、教育学部事務長を最後に大学を去るに当たり、やり残した数々の問題点について、その実現を見ずに去るのはむしろ慚愧に堪えませんが、あとに残る方々



の英知のもとに、よりよく解決発展する事を信じて疑いません。永遠に存続する富山大学にあって、きびしい内外の諸情勢下活躍が続けられる皆様の御健康と御

健斗、そして、大学がますますよき学園となりますよう、心からお祈りいたします。

## 新 任 教 官

吉田喜孝 助手（理学部）55, 1, 1.  
昭, 51, 3. 九州大学大学院理学研究科物理学専攻  
博士課程修了  
担当：固体物理学

志波和子 講師（教育学部）54, 11, 1.  
昭, 17, 3. 富山県立女子師範学校卒業  
担当：保育内容の研究

## めぐりきて

教育学部講師 志波和子

昨年11月から縁あって教育学部へまいり、幼稚園教員養成課程で学ぶ人たちと一緒に歩むことになりました。五福の地は20数年前、教育学部附属幼稚園が今の大学本部地点にあった頃、私が始めて幼稚園教師となった思い出多い所です。そこで過ごした7年間は幼い子どもたちと毎日いきいきと遊びにあけくれました。

その頃は現在のように物の豊かな時代ではありませんでしたが、それなりに工夫して、子どもも教師もまわりの自然にとけこみ、素朴な活動にからだごと打ち込んでいたようです。当時のことが何かにつけて思い出され、今、ブーメランの軌跡をたどって懐かしい古巣へ帰ったような安心感に包まれたりします。しかし

時には、発展拡張して昔日のおもかげのない中で、新しい仕事にとまどい、今浦島の思いなきにしもあらずです。

幸い附属にいた関係で、前と変わらずいろいろ教えて下さる先生方や職員の方たちのおかげで、スムーズに仕事に打ち込める環境におかれていることは、大変ありがたいことです。ひるがえって自分の中味を充実させていかなければと思い、将来幼児教育の担いてとなる若い人たちを相手に、私の学んだもの、経験したことをできるだけ生かして伝えたい。またお互いに求め触発して共に高めていけたら、と願っています。

## ～「旅人さん」～

理学部助手 吉田喜孝

「月日は百代の過客にして行き交う人も又旅人なり」の如く時の流れも、空間的移り行きも、たまたまここに居る私も自然現象の一つに過ぎない。自然の営みの絡み合いのモードは多様であっても、絡み合うメカニズムは単純である。「旅人さん」事私は、生れて初めての雪国の美しくも厳しい気候の下で人と自然環境との結び付きの新しい側面を見てこのように思いました。富山に赴任して一週間目に今年初めてという雪に会いました。一夜明けて一面の雪景色の美しさに感動を覚

えました。又、一步外に出て、今度は雪の厳しさに圧倒されました。特に研究能率が減速される点で圧倒されました。厳しい自然環境は反面で豊かな恵みを与えてくれていることが、早や、ひと月過ぎて分かりました。又これが人間と自然との折り合いを成り立たせている理由ではないかなと感じました。新しい土地に来て、自然の一側面を見出した様に、研究の面において新しい見方・考え方で自然の一側面を捉え得る様鋭意努力したいと思っています。

## “仮り住まいにて想うこと”

教養部助教授 森田弘之

とかく小人にはありあまる時間などは無用の長物のようである。昨年十月に母校に赴任して来て、当分は

着任後の身辺整理などで身をもてあますことはなかったが、一ヶ月もするとたはたと困ってしまった。時間が  
あり過ぎるのである。たしかに初めのうちは、大学院  
の学生連中との研究上のアドバイスとかディスカッ  
ションなどから開放され、自由な思考の時間が持てるこ  
とに新しい喜びを見出したものである。だがしかし、  
長年の習慣とは恐いもので、実験屋を続けてきた私  
にとっては体を動かしていなければ、頭が働かないよ  
うに出来あがってしまっている。

さて人生も半ば、そろそろメルクマークとなるべき仕  
事にとりかかる構想を練らなければなどと、机に向っ  
てみるものの、ものの十分もすると思考は雑念に妨げ  
られてしまう。あのやり残した仕事はどうかたづけよ  
うとか、今後の研究を進める上で必要な機器、設備  
などはどの様に手当しようかなどと、ずい分意気込ん  
だ割には次元の低い、現実的な問題に頭は占められて

しまう。時にはかつての同僚、知人などから研究の進  
展具合などを知らされると、しばらく実験室を遠ざか  
っているキャパシティのない我が頭脳は、絶大なるパ  
ータベーションを受けて早ばやと思考停止を宣言する  
ことになる。あとは雑念は雑念を呼び、読書すら手に  
つかないでいたらくである。そのあげくには人生は長  
い、オリジナルなアイディアを生むには、むしろこの  
様な実験室を離れて過ごす時間が必ずプラスになるは  
ずだなどと、一人よがりのオプティミストに一転する。  
まるで心理学の教科書を実地でいっているようである。  
“新任の弁”を書くつもりが、またまた雑念を呼んでし  
まった。桜開く四月には、このような雑念とはおさら  
ばして、新しい実験室で体を動かしながら思考作誤(勿  
論正字は試行錯誤)に励むいつもの自分にたちもど  
りたいものと念じています。最後にこの紙面をかりて、  
皆々様の御協力、御厚情を切にお願いする次第です。

## 近代経済諸学派のメッカを訪れて

—— 昭和54年度文部省在外研究員としての滞在を終えて ——

教育学部助教授

い  
鯨 沢 晃 三

私の短期在外研究は昨年9月15日から11月14日まで  
で、出向した国はイギリスを主たる滞在地として、ス  
イス(特にロザンヌ大学)およびオーストリア(特  
にウィーン大学)の三ヵ国であった。私が特にこれら  
の国と大学を選んだのは、周知のように、1870年代に時  
を同じくして抬頭をみた近代経済学の三大学派、すな  
わちケンブリッジ、ロザンヌおよびウィーン学派の  
発生の地におもむき、経済学上、伝統ある大学と、そこ  
での今日の研究、そしてそれらを歴史的に生み育んだ  
学問的風土と国情に接するためであった。そして、特  
にこれらの大学で現在活躍中の第一線の学者とコンタ  
クトをもつことが出来れば、今後の私の研究に資する  
ところ極めて大なるものがあると考えたからでもあっ  
た。

ところで、私は、これまで誠に非力ではあるが、と  
もかく経済成長モデルの分析(特に実物経済と貨幣経  
済のモデル接合)に関心を持ち続けてきた関係で、主  
にこの分野での学者とのコンタクトと学問的情報を得  
るべく努めた。

ところで、私がお会いし、経済学一般について私の  
成長モデル、あるいは日本経済について貴重な御意見  
やコメントを頂いた教授方は次のような方々であった。

すなわち、イギリスではM. ブローグ教授(ロンド  
ン大)、森嶋通夫教授(ロンドン経済大)、C. プリス  
教授(オックスフォード大)、P. オブライエン教授(ダ  
ーラム大)、A. スキナー教授(グラスゴー大)であり、  
後の二国ではA. ホーリィ教授(ロザンヌ大)、D.  
グランドヴィレ教授(ジュネーブ大)、G. ウインクラ  
ー教授(ウィーン大)、N. ヘンシェル教授(ウィーン  
経済大)といった学者方であった。これらの教授方へ  
の感謝の念はいうまでもないが、特に在外研究の慣れ  
ない一人旅で心身ともに極度に疲れがちな私を温かく  
迎え入れ、大変なおもてなしを頂いたスキナー教授と  
グランドヴィレ教授に対しては中心よりお礼申し上げ  
ねばならない。ここでは紙面の関係上、今回の在外研  
究中にうけた印象について若干記することにしたい。

まず、学問的な面では何れの国の学者も日本の経済  
学の近年におけるレベルの高さをそろって称賛された  
ことが私に強い印象を与えた。それは、私の拙劣な会  
話力でもって自己の論旨を述べたときに、返ってくる  
各教授の意見の中に必ずといってよいほど日本の経済  
学者の名が登場したことからも裏付けられたのであった。

また、上記の学者の多くは、私が現地に赴いて後に秘  
書を通していきなり面会を申込んだ方々であったが、

それにもかかわらず、何れも許された時間ぎりぎりまで心よく、かつ極めて熱心に意見を述べて下さった。私はこのような外国の学者方の人間的暖かさと旺盛な研究意欲に心から敬服した次第である。

次に話題が変わるが、訪問各国における物価高（インフレ）には驚かされた。特にロザンヌ市では小売店で卵一個が80円もしていたし、どの国も野菜類や魚類の品数が著しく貧しく品質もそろっていないのに値段だけは（大衆レストランの料理代も含めて）わが国の倍近くもしているようであった。思うに、これらの国々では高福祉・高負担ならびに軍事費等の影響が物価の面にも現われている訳で、一般勤労大衆の生活も決して楽ではないように感じられた次第である。

ところで、英国では幸いなことに学者以外の多くの知識人に会い、かつ招待をうける機会にも恵まれたが、そこでの話題には必ずといってよいほど近年の日本製品の優秀性と日本企業の顧客優先の姿勢が指摘され、

自国の企業やセールスマンの体質改善の必要性が主張されたのであった。かくして、私はいろいろな会合を通して、日本企業、従って日本経済の生産性向上意欲と環境適応力の優越性を強く認識すると同時に、国際市場における日本商品のシェア拡大の主要因を更めてそこに見出した感さえもったのである。

また、英国では今なお国民の間に強い class consciousness（階級意識）——すなわち、aristocracy をトップに、upper-middle, lower-middle, working, bottom の五階級——が厳存し、これがまた英国経済・社会の低迷や、いわゆる英国病の主要な因子になっているように感じられたのであった。更に、英国をはじめ訪れた国々では、教育上の階級格差や無意識的な先進国意識もあってか、ごく一部の人々を除いて日本人ほどには自国や世界の経済事情に精通してはおらず、また関心の低いことも経済活動や労働の生産性を停滞させる要因となっているように考えられたのである。

## パデュー大学での研究生生活を顧みて

工学部助教授 龍 山 智 栄

筆者は昭和52年10月から54年8月までの1年10ヶ月余、米国インディアナ州パデュー大学物理学科に、文部省在外研究員およびパデュー大学客員研究員として滞在する機会を得た。パデュー大学はシカゴの南東およそ150kmのウェストラファイエット市にある。ウォボッシュ川を挟んで東に隣接するラファイエット市と両市合わせて人口は約10万人、そのうち35,000人程が学生である。両市はパデュー大学を中心とした学園都市であり、大都市の喧騒もなく、研究、教育に適した静かな落ちついた街である。広大なキャンパスには120を超えるビルディングがあり、Engineering や Agriculture 等の10の School から構成されている。School は更にいくつかの Department や研究所から成り、物理学科は School of Science の1つの Department である。

半導体の研究ではパデュー大学はMIT, Bell 研究所等と並んでアメリカでも草分け的存在であり、現在も高い研究水準を保っている。教授にはいわゆる外国人が多い。固体物理関係でも Prof. H. Y. Fan（中国人で筆者の滞在した研究室、専門はレーザーミクシング、Raman散乱）、Prof. R. Bray（イスラエル人で専門はBrillouin散乱）、Prof. R. Colella（イタリア人で専門はX線回折）、Prof. A. K. Ramdas（インド人でルミネ

ッセンス、Raman散乱が専門）等各国の人々が精力的に研究を進めている。undergraduate（学部）、graduate school（大学院）には中国（台湾）、東南アジア、アフリカなどから多数の留学生が来ている。アメリカ社会の巨大な吸引力を見る思いであった。色々な国の人々が集まる割にはアメリカ人は外国のことには余り関心がないらしい。新聞も地方紙だけで、それには地域内の出来事はこと細かに載っているが外国の記事には乏しい。日本についても何ヵ月かに1回数行載る程度である。大平首相が渡米した時も地方の新聞ではほとんど記事にならない。アメリカ社会には極立った国際性と極立った孤立性が奇妙に同居しているように思われた。

graduate school のドクターコースの学生は（特に実験系では）ほとんど Professor から1ヶ月400～600ドルの salary を得ている。教授、助教授はそれらの salary を含めて研究費は一切自分で集め、更に集めた研究費の何割かを大学に収めねばならず仲々厳しい。しかし instrument shop, electronics shop, glass shop や drafting 等研究をサポートする体制がよく整備されている。図書館は夜12時頃まで開館しており、日曜日でも午後1時～10時まで開いている。

フットボールはアメリカで最も人気のあるスポーツである。9月～11月にかけて各地でプロの、そして大学の試合が展開される。大学の場合、全米がいくつかのブロックに分かれている。例えばパデュー大学は、イリノイ、オハイオ、ミシガン等近隣の10大学とで構成されるBig Tenと呼ばれるグループの1員で、これらの大学間でリーグ戦が行われる。1位あるいは2位のチームはRose BallとかPeach BallといったBall Gameに招待され、他のグループの勝者と試合をする。このBall Gameに行くことが大学フットボールの場合の目的になっている。パデューは7万人程収容出来る試合場を持っていてシーズン中地元で6試合する。試合は土曜日の1時からであるがその日は朝から街中ざわついている。試合中はチアガールやブラスバンドの華やかな応援があり見ていて楽しい。実に陽気な応援振りでアメリカ人の気質がよく現われる。フットボールが終わ

ると同時に、室内のバスケットの試合が始まる。フットボールにしてもバスケットにしても市民に大変人気があり試合の時には大勢つめかける。又冬期にはElliott Hall of Music (6000人以上収容出来る大劇場)で毎週とっていい程各種の演奏会や演劇が上演されている。その他、大学は研究教育のみでなく、文化、リクレーションなどあらゆる活動の中心になっていて市民に広くサービスしている。そこには100年を越えた歴史を持つ大学の余裕さえ感ぜられた。

アパートには同じ棟にイラン人夫妻(主人はパデュー大学の数学教授)がいた。奥さんはアメリカに余り馴染めないようであった。彼等は感情が細やかで日本人と通ずるものがあるように思われた。最近の米、イランの関係を見ていると、彼等はどのようにしているだろうか、手紙の返事もなく、気になっているこの頃である。

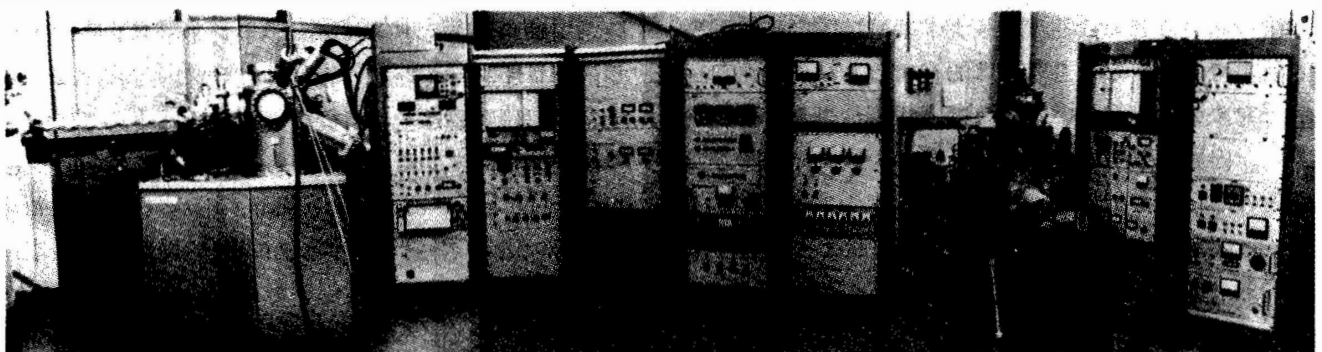
## E S C A 装置稼動案内

工学部教授 市 村 昭 二

54年度全学共通概算要求で設置が認められましたE S C A (Electron Spectroscopy for Chemical Analysis) 装置が昨年暮より工学部電子工学科基礎電子講座実験室に設置、試運転されておりましたが、漸く本格稼動の段階に入りました。本装置は前々年度より設置稼動しているL E E D装置と同様、材料表面の物性を研究する目的をもって設置計画をしたもので、 $10^{-9}$  から  $10^{-11}$  torr という超高真空中で、材料固有の清浄表面を作製維持し、表面での電子物性、吸着反応、腐蝕反応、原子配列、原子組成に関する情報を得ることの出来るものであります。特に今回設置を見た装置はE S C Aの他に、オージェ電子スペクトル、S I M S (二次イオン質量スペクトル)、R H E E D (反射型高エネルギー電子線回析)の測定も出来る複合表面分析装置

でありますので多方面にわたっての応用研究が可能であり、また超高真空チャンバーの他に予備真空チャンバーが附置されていて、そこで各種の気体の吸着反応やその他の反応前処理が施され、そのまゝ、うちに超高真空チャンバーへ試料を移送して表面観察が出来る機能も設けてあります。

本装置の設置によりL E E D装置とともに本学の表面科学研究は一層の進展が期待される状態となりました。高分子材料、触媒、金属・合金材料、半導体材料、表面処理、化学工学装置、加工工学、固体電子物性など幅広い研究者の活用を期待しています。また北信越地区としては最初の設備であり、他の研究機関の研究者にも活用の路を開きたいと考えて、今後の運営をすすめる方針であります。



## 第三回教員養成課程合宿研修：「教育実習セミナー」報告

学生実行委員長 浅 永 剛 司

すぐれた教員の養成確保を目的とした教育実習セミナーも今年で三回目となりました。今年は、企画に入る時期が遅くなり、十分に話し合う機会が少なく内容が乏しくなるおそれがあるかと思いましたが、企画担当の先生方と努力し、昨年を上回る内容が企画されました。まず、VTRを取り入れた点が、新しい点として挙げられます。前回の時も案としてはあがっていたようですが、実現に至らなかったそうで、初めての試みとして私たちも慎重に取り組みました。操作の上で多少の問題がありましたが、無事撮り終えることができました。また、日程を大幅に変更し、分科会活動に変化をもたせ、最後の日には高山の飛驒の里まで足をのばす企画も立てました。分科会活動は、時間

の不足から十分な話し合いができなかったようでしたが、協力校の諸先生方からの助言を得て各人それぞれ反省材料としていたようでした。天候の都合で24日に変更になりましたが、キャンプファイヤーは、大成功に終わりました。総務の委員が十分に企画を練ってくれましたので、参加者全員楽しく過ごすことができました。

この教育実習セミナーも、その企画の見直しの動きがあるそうですが、教育実習の反省会のためにも教育学部全体のまとまりのためにも、永久に存続してほしいと思います。最後に、VTR撮影に協力していただいた教育学の技官栗山さん、その他の方々に厚く感謝いたします。

### 学部だより

#### ◇人文学部だより◇

##### ●手崎政男教授の最終講義行われる

3月停年退官される手崎教授の最終講義が2月14日に国語国文学研究室の主催で行われた。教授の学徳をしたう卒業生や学内関係者約200名が参集した。講義は「文学史と文学論史—私の歩んだ道—」と題して行われ、教授の今までの生き方と文学研究のかかわりを説かれた。教授の専攻は中世の歌論で著書に『有心』がある。

##### ●平田 純教授『アメリカ大衆芸術物語』（ラッセル・ナイ著）を共訳される

大衆文学・芸能・マスコミにわたる大衆芸術の全容を詳細なデータと博識に基づき紹介した本である。共訳者は比較文学コースの非常勤講師亀井俊介氏。研究社刊。3冊。1900円～2400円。平田教授には『暴力小説とは何か』などの訳書がある。

##### ●梶井 陟教授『朝鮮語を考える』を刊行される

一国の言語を奪うことにより民族抹殺を謀った日本の統治政策を告発する書である。龍溪書舎刊。1800円。梶井教授には『朝鮮語入門』『現代朝鮮文学選』などの著書がある。

### 学生部だより

#### ●スキー講習会終了

学生部、体育会主催による、恒例のスキー講習会は、

去る1月6日から11日までの5泊6日の日程で志賀高原ブナ平スキー場を中心に実施された。

年末さらに年始とも全然降雪がなく実施が危ぶまれたが、開催直前に至りドカッと降雪があり雪の心配だけではなく無事実施され、技術の向上と心の交流を深める成果をおさめ終了しましたことを、ここにあらためて関係各位に感謝いたします。

#### ●スキー講習会に参加して

教育学部二年 白 川 由紀子

わたしは、中学校時代にスキー遠足に出かけても、スキーをはかずに、ビニールですべるという初心者だったので、講習会では初級班の11班の一員でした。清広荘に着いた当日は開講式と班別ミーティング。開講式では体育会の役員の方から、生活時間のことやマナーのことについて注意があり、「なんて厳しいことを言われるんだろう」と、明日からがちょっぴり不安になりました。そして2日目にスキーをはいて吹雪のゲレンデへ……。まず最初に習ったのはころび方、そして方向転換、ボーゲン etc……。わたしは内エッジを効かすことができなくて、「あーっ、止まらん、あーっ、あーっ、」と、一騒ぎをして、平らな所でしか止まることができませんでした。キックターンも、斜面に対してスキーが直角になっていれば、斜面を滑ることはないと言ったので、「せえのっ」のかけ声で右足をあげて、左足の向きとは正反対に、そしてスキーは平行に並べようとするのですが、最初のうちは、なかなか足があらなくて、スキーとスキーが重なったまま後ろ向きに滑り出してしまい、後ろ向きではどうしようもない

ので、ドテッと転んで体で滑るのを止めて、ついでに  
 転ったまま方向転換をしてしまうありさまでした。滑  
 っては階段歩行をくり返しているうちに疲れてしまい、  
 止まってから後歩きをして列についたりしたので、右  
 足に左足をそろえて、という練習は初日にはできませ  
 んでした。かくして悲しいことに初日に私が得たこと  
 は、スキーは体で止めるということと、方向転換は寝  
 ころんでしたほうが楽だということでした。2日目  
 には、午前中、ボーゲンでのターンの仕方を習い、午後  
 からは、七曲り、西館へ向いました。2日目になっ  
 てもまだ私は、ボーゲンができなくて、七曲りでは、ま  
 ず入口でころんでしまい、みんなの好意で、先生のすぐ  
 後についていたのに、2、3人と追い抜かれ、それ  
 から後は、曲り角ごとに例の体で止める技を発揮し、  
 下にたどり着いた時には、一番最後でした。そして、  
 西館は、アイスパーンとこぶばっかりで、何故か、急  
 な傾斜ではないのに、90度の壁を滑り降りるようで、  
 私はこのまま落ちていってしまうのではないかと滑る  
 前から『こわい』という気持ちでいっぱい、どうに  
 かしてのがれることができないかしらと泣きたい思い  
 でした。滑る前からこう考えているのではうまく滑れ  
 るわけがありません。結果は惨めなもので、わたしは  
 11班の落ちこぼれだと痛切し、講習を受けるのを止め  
 ようか、などと馬鹿なことを考えてしまいました。け  
 れどこの夜の松明滑降の火の描く美しさに、うまく滑

れるようになれば、と思い、コンパで中級班や上級  
 班の方たちに、「ころぶ人ほど、うまくなるというから  
 頑張るなさい」とはげまされ、練習3日目には、ころ  
 ぶことに抵抗もなくなりました。すると不思議なもの  
 でボーゲンもかろうじて出来るようになり、スキーを  
 することが楽しくて楽しくて、4日目には、2日目に  
 あんなにこわかった西館をちゃんと滑り降りることが  
 できました。こんな6日間があつという間にすぎて、  
 楽しくなった頃には、もう最終日になっていました。  
 技術はまだないけれど、スキーの楽しさを知り、これ  
 からもスキーを続けたいと思えるようになっただけで  
 も講習会に参加したかいがあったと思っています。

### ●学生証の査証について

1、2、3年次生は、各学部、教養部の学務係（教  
 養部においては学生係）で、昭和55年度の査証を行な  
 いますので必ず受けて下さい。

なお、査証を受けない学生証は無効となります。

### ◆◆学園ニュース編集委員◆◆

学生部長 教 授 岩淵富治  
 人文学部 教 授 山口 博  
 教育学部 " 大塚恵一  
 経済学部 助教授 坂口正志  
 理 学 部 教 授 堀 令司  
 工 学 部 " 市村昭二  
 教 養 部 " 奥貫晴弘

## 昭和55年度 富山大学入学志願者数調

学 部	学 科 ・ 課 程	昭和55年度			昭和54年度			備 考
		募集人員	志願者数	倍 率	募集人員	志願者数	倍 率	
人文学部	人 文 学 科	80	316	3.95	80	319	3.99	
	語 学 文 学 科	80	219	2.74	80	293	3.66	
	計	160	535	3.34	160	612	3.83	
教育学部	小学校教員養成課程	140	302	2.16	140	291	2.08	
	中学校教員養成課程	50	146	2.92	50	180	3.60	
	養護学校教員養成課程	20	115	5.75	20	82	4.10	
	幼稚園教員養成課程	30	110	3.67	30	129	4.30	
	計	240	673	2.80	240	682	2.84	
経済学部	経 済 学 科	120	295	2.46	120	240	2.00	
	経 営 学 科	120	480	4.00	120	281	2.34	
	経 営 法 学 科	60	130	2.17	60	135	2.25	
	計	300	905	3.02	300	656	2.19	
理 学 部	数 学 学 科	40	104	2.60	40	165	4.13	
	物 理 学 科	40	75	1.88	40	108	2.70	
	化 学 学 科	40	70	1.75	40	128	3.20	
	生 物 学 科	30	56	1.87	30	115	3.83	
	地 球 科 学 科	30	57	1.90	30	120	4.00	
	計	180	362	2.01	180	636	3.53	
工 学 部	電 気 工 学 科	50	133	2.66	50	89	1.78	
	工 業 化 学 科	45	238	5.29	45	74	1.64	
	金 属 工 学 科	40	213	5.33	40	71	1.78	
	機 械 工 学 科	50	145	2.90	50	89	1.78	
	生産機械工学科	40	134	3.35	40	65	1.64	
	化 学 工 学 科	40	127	3.18	40	63	1.58	
	電 子 工 学 科	40	155	3.88	40	58	1.45	
	計	305	1,145	3.75	305	509	1.67	
合	計	1,185	3,620	3.05	1,185	3,095	2.61	